

ありのままの私を生きる

群馬県 太田市立南中学校 三年
岡田 莉幸

私には性別が無い。私がそう、決めたから。

小学校六年生のとき、私は、自分のことを「俺」と呼び始めた。「俺」という言葉を、私も使ってみたかったからだ。しかし、

『俺』って言うの？ 変なの。」

という周りの友達への反応。母も「俺」という言葉に驚いた顔をしていた。どうして驚かれているのか、私にはよくわからなかった。体つきは女性になっていくし、進学する中学校の制服はスカート。そんな「当たり前」とされていくことがとても嫌だった。

同じ悩みを抱える人と話したい。そう感じた私は、オープンチャットを開設した。それは、インターネット上で共通の話題について話し合えるサービスのことだ。

「自分の性別について悩んでいる方、話しませんか。」

集まったのは私と同じ世代の人たち。自分の性別について悩んでいる人だけではなく、同性が好きな人、どちらの性も好きな人などが、相談し合える場所になった。

そしてあるとき、衝撃的なことがあった。女の子を好きになった女の子が思い切って相手に告白してみたところ、付き合うことができたというのだ。女の子は、男の子としか付き合えない、そう思っていた当時の私は、とてもびっくりした。同時に、常識にとらわれない生き方をするその子が、とてもかっこよく見えた。

しかし、心のモヤモヤは晴れなかった。私は、男性として生きたいのか、女性のままでありたいのか。考えれば考えるほど不安になっていき、「自分」が分からなくなった。そんな私を嫌いになりそうだった。

中学生になった。何もかもが不安な私を助け出してくれたのは、入部したバレー部の顧問の先生だった。

「挨拶や返事は、大きな声で元気よくしなさい。そうすれば、自分の殻を破れるから。」

顧問の先生その言葉通りに実践してみようと思った。部活の練習中や廊下で、先生や友達にすれちがう時。大きな声で挨拶や返事をした。練習中、先輩が出してくれたボールに

「こーい！」

と言ったときには、世界がぱっと明るくなったように感じた。すると、本当に自分の性格が変わってきた。友達に笑顔で接したり、合唱の指揮者に立候補したりするなんて、悩んでいるときの私には、考えられないことだった。私は、そんな自分を好きになった。

それと同時に、自分のことがはつきりわかるようになってきた。可愛いものよりも格好いいものが好きなこと。髪を切って、男の子の服を着たかったこと。それらを行動に移していくと、自分の好きなところがさらに増えた。

最近女の子の服を楽しむこともある。男でも女でもない「私」を生きていると感じる。

「わざわざどちらかに決めなくても、いいんじゃない？」

これは、オープンチャットで私の相談相手になってくれる子の何気ない言葉だった。これが、今の私にとって大切な言葉だ。

今、「あなたの性別は何ですか？」と聞かれたら、私はこう答える。

「私の性別はありません。」

私は自分の思いを押し殺して生きたくない。「当たり前」にとらわれず、ありのままの私を生きたい。自分の生き方は自分で決めるのだ。

私の家族はそんな私のことを少しづつ応援してくれるようになった。しかし、私の作ったオープンチャットで出会った友達の中には、自分の性に違和感を抱えながら家族に言えずにいる人や、思い切ってカミングアウトしたところ家族との仲が壊れてしまった人もい

る。

私が望むのは、それぞれの生き方に、驚く人も非難する人もいない社会だ。女の子と男の子が付き合うことや性別があることも「当たり前」だが、同性同士で付き合うことや性別が無いことも「当たり前」なのだ。ありのままの私たちを認め合うからこそ、優しく、明るくて、温かい、よい社会になるのだと私は思う。そんな社会が創れたら、どんな人も、今よりも、ずっと、ずっと、生きることが、楽しくなるはずだ。